

[論説]

倫理と無常

——道元を手掛かりに——

佐伯啓思

一

人間の倫理が「善く生きる」という「生」のあり方と結びついており、「善き生」の目的が「幸福」にある、としたのはアリストテレスであった。「幸福」を意味する「ユーダイモニア (eudaimonia)」の語が示すのは、たとえばプラトンの「イデア」のような永遠の超越的存在につくことではなく、この現実の中において人がその活動（実践）において具体的に選び取るような究極的な生のあり方である。それは究極的な善であるが、この善は、人間がその活動能力を最高度に高めることで、つまり、卓越性の実現という徳の高度な実践において実現できるものであった。それゆえ人は、このような卓越性を目指して、善を実現しようとするような生を繰り返し実践し、それを習慣化する必要がある。そこに「エートス (ethos)」としての「エシック (ethic)」が生まれる。

もちろん、西洋思想の文脈でいえば、古代ギリシャの倫理観念がそのまま現代まで直結するわけではなく、古代と現代の中間にあっても、キリスト教的倫理観や近代のカントの実践理性に基づく倫理観から、ニーチェによ

るルサンチマンとしての倫理・道徳への攻撃など、倫理は西洋思想を通じる関心であった。この小論で、私は、西洋思想とは対比される日本の倫理観の源泉に焦点を合わせてみたいと思うが、この場合、ここで大事なものは、西洋思想における倫理観念の変遷というよりも、その底を一貫して流れる倫理観、すなわち、それが、人間の生の充実、幸福の実現と不可分であり、そこにいずれ、幸福の実現に向けた個人の強い意志や意欲が想定されているという点にある。

幸福が、ギリシャのポリスにおける卓越した市民と切り離せないにせよ、キリスト教的な禁欲的な隣人愛の実践という社会的・宗教的生活にあるにせよ、何らかの生の理想がそこには想定されている。その理想に向けて、強固な意思をもって自己実現をはかるところに西洋の倫理観の基調があるといつてよからう。キリスト教的な自己否定においても、あるいは、カントのように絶対的な義務としてであっても、それを実現するには、己自身を宗教的義務や定言命令的義務に従わせる強固な理性的な意思が必要であった。

これもまた、アリストテレスの伝統に従うものである。なぜなら、「善き生活」を求めるということはまさに人間が人間である所以であり、では、人間が動物と区別される点は何かといえば、まさに人間の理性能力にこそある、というのがアリストテレスの見解だったからである。倫理や道徳、幸福を論じる時でも、その根底に人間の「理性」と「意思」を定めるといふ態度は、西洋思想あるいは西洋文化の中核を形作っている。

これと対比的に眺めれば、日本の倫理観は、強烈な自己実現やあるいは逆に強固な自己否定に倫理的実践の基礎を求めようとする西洋的倫理観とは大きく異なっている。西洋思想の根本が人間の「理性」と「意思」にあるのに対して、日本の倫理的観念は、人間に固有の「理性」や「意思」をむしろ否定し、多かれ少なかれ、それを超えた「おのずからなる」「おのずからある」といふ態度へと接近するものであった。それはまた日本の独特の

自然観へとつながるものである。「自然」をこの世の万物すべてを包括する観念として理解し、しかもその上で、自然（シゼン）はもともと自然（ジネン）である、という日本独特の感覚は、西洋的な意味での倫理観念とは大きく異なった、別種のもを生成した。

あえて日本的な倫理観というとなれば、それは、人間の生を、山川草木から四季の移ろい、聳え立つ山々から変転する川の流れ、発芽しては成長し、やがては枯れてゆく草花といった万物の理と同調させたところにこそあるだろう。この意味での「自然」は、たえず変転し続け、しかもその変化を作動させる外的な動因をもたない。それは人間には計り知れない何か妙なる力によって自ずと生成し続ける巨大な運動体であり、そこには何の目的も完成もない。

だからこそ、人間がある作為をもってこの運動体に作用することは意味をもたず、また、そこに人工的な究極目的を作り出そうとしても無意味だ、というある種の諦念が生まれる。それゆえ、諦念をもって、この「自然」という「おのずから」の動きにうまく同調する覚悟こそが、強いていえば、人間の「善き生」ということになる。いやそのためには、何よりも、万物が「おのずから」のたえざる変転であり、意味なき生成であり、それらが相互につながった目にはみえない織物のような途方もない偶然の結合である、ということを知らなければならぬ。人は理性によって他の存在から区別される特権的存在ではなく、しばしば「主体」という名を冠して呼ばれるような、理性と意思によって「自然」に働きかける存在でもない。

もともと古代ギリシャにあっても、「自然」概念は「ピュシス」と呼ばれる、万物を包摂して永遠に生成・変化を続ける宇宙的なものに見なされていたが、それが、「ピュシス」と「ノモス」の対比とともに、人間の働き

は、いずれ人為的な習慣化や制度を意味する「ノモス」の方へと送り出され、倫理も「ピュシス」とのつながりを断たれて「ノモス」の側へとその場所を変えていった。日本語の文脈でいえば「自然」から「作為」への転換である。

だが、日本においては、「ピュシス」に対する「ノモス」というような対比は基本的には生じていない。「自然」と「作為」の対比も、丸山眞男のかなり無理な徂徠解釈にもかかわらず、少なくとも劇的な形で生じたことはない。それが生じていないからこそ、丸山も、後年になって「歴史意識の古層」を問題とせざるをえなかったのである。

それはともかく、日本の倫理観念の少なくともひとつの特徴は、それが、理性や意思という主体の徹底した主意主義へと向かうのとはまったく逆に、人間の理性や意思への配慮などいっさいなしに、人間をそのまま自然のなかに溶け込ませるといふ独自の方向をとったという点にあらう。しかもそれは、ただそのように人間を認識するというような観照的知識のことではない。そうではなく、本当にそのような境地にたつことが、一種の真実の知覚であり、また真なる生の実践になる、というのである。人が自然のうちにあるという境地は、日常のある種のたえざる実践による体得でしかありえないのである。

このような独特の自然観、人間観はまた、日本に個性的な文化的感覚を生み出した。それは次のようなものであった。人間もまた他の一切の存在と同様に、自然のなかでたえず生成し変化し流転して形を変えてゆくものだとすれば、人間の真相は、決して常なる実体を持たないという意味で「無」だ、というのである。しかも、それは人間だけのことではない。万物がすべて「無」なのである。そこでこうなる。確かに、この現実世界にあって、様々な出来事や事態に遭遇し、常に自我に囚われてあくせくしている人間がそのまま自己が「無」であること

を知るのは容易なことでない。とすれば、人間は、自然万物のひとつひとつに目を凝らし、己を無にして自然に溶け込み、自然と同調することで、そこに恒常的な実体など存在しないことを知る。その時、自然に没入する自我などというものも存在しない。そのことをしかと分かること。言葉ではなく体得すること。こうして一切が「無」であるという非言語的な真の境地へ至ることを「覚り」と呼んだのだった。

これが日本的倫理観のすべてとはいわないが、日本の倫理観念のひとつの方向を示していることは間違いないだろう。いうまでもなく、そこには仏教の影響が強い。いや、より正確には、もともとあった日本の伝統的な自然観やカミの観念と、大陸伝来の仏教が結合して独特の人生哲学が作り出された、といってよいだろう。天台本覚思想や密教にその典型を見て取ることができようが、ここでは、少し道元の所説を参照してみたい。

一一

『正法眼蔵』の「唯仏与仏」の巻に次のようなことが書かれている。

人がひとり生きているとして、それがどのように始まりどのように終わるのかはわからない。終わりも始まりもわからないけれど、人は生まれてきたのだ。また山河大地の始めも終わりもわからないけれど、人はその山河大地を踏み歩いている。人は山河大地とともに生きてきたのである。そうであれば、山河大地もわが生と等しいものとして受け入れなければいけない。発心してから覚りをえるまで、すべての山河大地と、そしてすべての衆生とともに修行することで、すべてが同時に覚りに達するのである。

一切の山河大地も衆生もすべてが同時に覚る、というのである。だが、自然とともに覚るとはどういうことで